

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第十七主日(10/9)礼拝

「主にある生と死」

使徒言行録第七章 54 節から第八章 1a 節

【聖書】

使徒言行録 7:54 人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ぎしりした。55 ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、56「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。57 人々は大声で叫びながら耳を覆い、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、58 都の外に引きずり出して石を投げつけた。証人たちは、自分の上着を脱いで、サウロと言う若者の足元に置いた。59 人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、私の霊をお受けください」と言った。60 そして、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。こう言って、ステファノは眠りに就いた。

8:1 サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。

1 最初の殉教

ここ数週間、ホスピスに行く事が増えました。食べる事も飲むことも難しくなり衰弱していく方の傍らにたたずむ時、人は、死に臨んで、何の力もないことが身に染みます。驚くほどに無力です。死にゆくことは絶対的孤独であることを実感します。どんなに親しい人であっても死に向かう道を共に歩むことはできません。だからでしょうか。「“キリスト者として死ぬ”とはどういうことなのだろうか」とも思うようになりました。数年前に亡くなった永六輔さんは、「死に方ってのは、生き方です。」と語ったそうです。人は死に行く時、最も弱くなるのですから、その人の在り方の根本が顕わになる、その人がどう生きて来たかは、死に行く時をどう生きるか、に現れるのでしょうか。

今日の聖書は、ステファノの最期を描いています。教会ができてから最初の300年間、ユダヤ人社会から排斥されローマ帝国からも迫害され、数えきれないキリスト者が殉教します。しかし、新約聖書では、主イエス以外のキリスト者が死にゆく様子を描いた場面は多くありません。殆ど今日の箇所が唯一と言ってもよいほどです。それだけにルカは、ステファノの最期を、キリスト者の最期の代表例として描いているのではないか、と思います。今日はステファノの最期を描く聖書の言葉から、キリスト者として生きること、死ぬことはどういうことなのか、聞いていきたいと思います。

2 歯軋りする人々

ステファノの長い説教の後、容赦ない糾弾の言葉が、最高法院の議員たちに向けられます。それらが聖霊なる御神がステファノを通して語った審きの言葉だ、と先週の礼拝説教で

取り次ぎました。しかし、この言葉を聴いてすぐに悔い改めた者はいませんでした。「人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ざしりした。」「激しく怒り」と訳されている言葉を直訳すれば、「心の痛い所を突かれて激怒する」。彼らは心の中でステファノの告発が正しいことに気づいていたのかもしれませんが。でもそれを受け入れると、自分の今までの生き方が出来なくなる、議員でも祭司でもいられなくなる、だから、気づかないふりをしていたのかもしれませんが。聖霊なる御神に逆らっていたのです。

だからこそ、彼らはステファノに向かって怒り狂い「歯ざしりした」。「歯ざしり」という言葉が聖書で使われる場合、殆どが、神に敵対する者達が、神の厳しい審きの言葉に、激しく怒り悔しがり地団太踏む様子を描くのに用いられています。神の言葉に打ち砕かれ、悔い改めるのとは正反対、強く固く歯を噛みしめ、神への敵意を剥き出しにする様子、それが「歯ざしりする」です。私自身、「あの時は歯ざしりしていたな」という思う過去があります。自分は神から遠い所にいました、神のもとに立ち帰れたのは、ひたすら神の憐みと信仰の仲間達の執り成しの祈りの故です。

3 天をみつめるステファノ

さて、一方のステファノはどうでしょうか。“ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見た”と語ります。「天を見つめ」の「見つめ」は、ちらっと見る、というのではなく、「目を注ぐ、じっと見つめる、凝視する」というニュアンスの言葉です。他の人々の目と心は、につっき敵、ステファノに集まっていたましたが、ステファノの目と心は、ひたすら神を求め、天に向いていた、とルカは語ります。殺意に満ちた敵のただ中で味方もおらずただ一人のステファノが恐れと不安にかき乱されることなく、天の御神へと集中することができたのは、聖霊に満たされ神の御力が働いていたからでしょう。

続けてルカはステファノが見た幻を彼の言葉で次のように記します。「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見える。」「ああ」と訳されている言葉は、「見よ！」という意味の言葉。ステファノがこのような幻を見た事を言い換えれば、彼の全存在が、天の御神と主イエス・キリストに強く固く捉えられた、ステファノは、これ以上ない位の強さで神と主キリストが生きて働き、この世界を支配しておられることを知った、という事ではないでしょうか。

そのステファノの確信がどのようなものか分かるのが、「人の子が神の右に立っておられる」という言葉です。人の子とは、イエス・キリストのことです。「神の右に」というのは、先ほど、使徒信条で「全能の父なる神の右に座したまえり」と告白した通りです。その意味は、全知全能であり天地万物の創造者である天の御神と共に、主キリスト・イエスがこの世界を支配しておられる、という事。ここで、「あれっ」と思った方もいるかもしれませんが。使徒信条では「神の右に座し給えり」とありますが、ステファノが見たのは、神の右に立っておられる主です。普段は神の右に座しておられる主が、ステファノの幻の中では立っておられる、この違

いを多くの信仰者達は次のように理解しました。「主イエス・キリストは、ステファノを御許に迎える為に立ち上がられた」。主は座ったままではおられないほどに、ご自身に従って生きる者を慈しみ、手を差し伸べてくださるというのです。

しかし、ステファノの言葉に耳を傾け、天に目を向ける者はいませんでした。却って彼らの怒りは燃え上がります。「人々は大声で叫びながら耳を覆い、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げつけた。」普段では考えられないようなことが起こりました。こともあろうに、ユダヤ社会の最高意思決定機関が、サタンに魅入られたように怒りに駆られ、不法なリンチを行ったのです。そのようにして彼らは、51節から54節の神の裁きの言葉「心と耳に割礼を受けていない人々、あなたがたは常に聖霊に逆らっています」が正しいことを彼ら自身で立証したのです。

ですが、ここで神に逆らうものとして殺されたのは、最高法院の議員達ではなく、ステファノでした。都の外に引きずり出され、石打ちという恐ろしい刑にステファノは処せられます。石打ちの刑は、様々に伝えられているのですが、一説では、被告は真っ裸にされて、三メートル以上ある深い穴に突き落とされたそうです。そして、先ず、有罪を証言した証人達が石を投げ、それでも死ななければ、皆で石を投げるのが決まりでした。証人達が最初に石を投げるのは、自分の証言の責任を取るためです。石打ちの刑の為に深い穴は、まさに死の淵、そこでは何の望みも抱けない、全ての希望が息絶える場所。ステファノは死にぐるりと取り囲まれた深い淵へと突き落とされました。

4 ステファノの最期、主イエスの最期

しかし、“人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、私の霊をお受けください」と言った。そして、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。”とルカはステファノの様子を記します。この部分を読んで、皆さん、何かお気づきになりませんか。ルカ福音書が描く主イエスが十字架上で語った言葉とステファノの最期の言葉がよく似ているのです。一つ目の共通点は、主イエスが十字架に架けられる時、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか知らないのです。」と祈られた言葉です。二つ目の共通点は、主イエスの最期の言葉です。主は、最後に大声で「父よ、私の霊を御手に委ねます」叫ばれました。この主の「父よ、私の霊を御手に委ねます」という最後の叫びは、先ほど、交読文で共に読み交わした詩編31篇の6節「まことの神、主よ、御手にわたしの霊を委ねます。」を主イエスが引用して祈られた、と考えられています。そして、詩篇31のこの言葉は、神の民が、毎日の夕べの祈り、眠りに就く前に祈りに使っていたそうです。主イエスも又、この言葉で毎晩眠りに就いておられたのでしょう。眠っている時、人は最も無防備な状態となります。敵や災害などを通じて、死が自分に襲いかかるかもしれませんが、眠っていてはどうにも防ぎようがありません。だから、神の民は、眠っている間、神に自分自身の命を守って頂こうと、自身の命を神に委ねます、と祈り、神の御手の内

で安らかに憩うこと、休息する事を願う夕べを重ねて生きました。

神の御手に自身を委ね、守っていただかなくてはならないのは、死の場面でも言えることです。死に行く時ほど、全知全能であり命の造り主である真の御神以外は、何者も自分の命を守る事も救うこともできないのだ、と、私たちがはっきりと知る時はないでしょう。どんなに膨大な富の中に生きてとしても、全世界の人々の尊敬を受けるような名誉を得ていたとしても、全ての人々がひれ伏すほどの地位と権力を持っていたとしても、富も名誉も地位も、死に行く時には何の役にも立ちません。親しい人たちとの関係でさえそうです。誰一人共に死ぬる人はいないのです。私達の持っていたものは全て余すところなく取り払われ、真っ裸で一人で死と向き合わねばなりません。そこに、命の神がおられなければ、誰が死を生きる事に耐えられましょうか。

しかし、主イエス・キリストが十字架上で「父よ、私の霊を御手に委ねます」と声で叫んだとき、父なる神はそこにおられませんでした。福音書では、主の最期の時を描くに当たって、「**昼の十二時ころ全地が暗くなり、それが三時まで続いた**」と語ります。昼の十二時、太陽が光輝く時間にも拘わらず、全地が暗くなったのは、神がおられなくなった、と言うことを表します。父なる御神、主イエス・キリストを見放した、完全に棄て去ったのです。このような最期を迎えたのは主イエスだけです。だから、カール・バルトは語ります。「神は、ただ一人、主イエスのみを完全に見棄てた」。マルコ福音書、マタイ福音書が記す、主イエス、神の独り子の叫び「**我が神、我が神、どうして私を見捨てられたのですか**」からも、主イエスが見捨てられたことが分かります。神が全くおられない所で、それでも尚、父なる神を神として呼び求めることは、罪ある私達人間に出来ることではありません。ただ神の独り子であるキリストのみ出来る。しかし、何故、主イエス・キリストは最後の最期まで、父なる御神を神として呼び求めたのでしょうか。神が共におられない事を主はご存じだったのに。

それは、私たち弱い人間、罪ある人間、主イエスほど強くは、天の御神と結びついていない者達が、死に行く時に立たなければならぬ絶望の底で、又、生きていて遭遇する大きな試練の極みで、神を呼び求める事ができる為ではないか、と思います。誰一人助ける者がいない時、神の独り子が神を呼び求める叫び、アッバ、父よ、と呼び求める声だけが人を確かに生かす希望となるのです。どのような言葉もどのような業も突破できない死の包囲網にじわじわと迫られた時、ただ永遠の神、命の源である方を呼び求める御子の声のみが死の包囲網を突破できるのです。何故なら、主イエスは三日目に永遠の命へと甦られたお方、死に勝利されたお方であるから。だから、私たちが、絶望の底に突き落とされた時も、死に行く時にも、主に倣って神を呼び求め希望に生きることが出来る為に、主イエスは最後の最期まで絶望と戦ってくださいました。私たちが死の間際まで神を求めて生き、死に屈服し敗北しない為に、私たちが絶望に負けてしまわないために、どんな時でも永遠の命への希望に生き切ることが出来るために、全てをささげて叫んだのです。なんという愛かと思います。

ステファノは、敵に取り囲まれ死に行こうとしている時、主の渾身の祈りに込められた深い愛が今、自分に溢れるほどに注がれていることを実感した、主が永遠の命を約束してくださ

っていることを確信したのだと思います。だから、自分に向かって手を差し伸べる主イエス・キリストに向かい、その御手に自分を投げ出すように祈ることができた、のではないのでしょうか。「主イエスよ、私の霊をお受けください」。そして、居住まいを正して、ひざまずき、自分を殺そうと石を投げつけている者達の為に「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で祈りました。まるで、天から御覧になった主キリスト・イエスに促されるかのように、主の愛に応えるように。主イエス・キリストの弟子・ステファノは、聖霊なる御神に導かれ、主イエスに倣って生き、聖霊なる御神の御力により主イエスに倣って死にました。そんな彼は滅びてはいません。「眠りについた」のです。

5 主を呼び求めて生きる

ステファノの最期はわたし達の死に行く時は異なるのでしょうか。ある神学者は、「ステファノは信仰の英雄である」と語ります。が、私は違和感があります。少なくとも、彼は、偉大な信仰を生き死のう、とは思っていなかったはずです。ただ、主イエスに倣うべく聖霊の導きに従って生き、死んだのです。

使徒パウロのローマ書での言葉が思い出されます。「わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」(ローマ書14:7~8)。ここで「自分のため」「主のため」と訳されている言葉には、「自分にあって」「主にあって」とも訳せる言葉です。ですから、「わたしたちは、生きるとすれば主にあって生き、死ぬとすれば主にあって死ぬのです。」と訳すこともできます。パウロは、まるでステファノのことを語っているようです。

パウロというのはローマ名であり、ヘブライ語の名前は、サウロ。使徒パウロは、ステファノを殺した者達はその足元に上着を預けるほど信頼していた青年であり、ステファノの殺害に賛成していました。しかし、サウロ青年は、ステファノが最期の言葉、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」という大声の叫びを耳にし、その言葉が心に刻まれていたのではないかと、と思います。やがて、彼自身が復活のキリストと出会い、十字架の主をキリストと告白する者になりました、そして、今度は迫害される側に立ち、幾度も命の危機にあいました。その時パウロは、ステファノの最期を思い起したのではないかと想像します。「ああ、ステファノは、主に倣ってこのように生き、そして死んだのだ」と、パウロもステファノの死を経験したと言ってよいでしょう。だからこそ、パウロは確信をもって、「キリスト者は、主にあっていき、主にあって死ぬ」と断言できたのだと思います。

私達も、ステファノのように、パウロのように、聖霊に満たされ、その御力により頼み、自分を迎える為に立ち上がってくださるキリスト・イエスを見あげて喜びのうちに神を呼び求めて生き、そして眠りに就きたい、と願います。罪や死に対して齒軋りするのでも、耳をふさぐのでもなく。

ですが、普段から、聖霊の御力により頼むこともせず、神のみ名を呼び求めていなくて、どうして最後の最期に主イエスのみ名を呼ぶ事ができるでしょうか。死に行く時は、最も弱く最も力がない時。普段していない事はできません。だから、私たちは普段から神を求め、神を礼拝して生きるのです。神の御前で礼拝することを通して、自分を神として自己中心に生きる古い自分を滅ぼして頂くために、聖霊により頼んで自身を差し出し、キリスト・イエスの内にあって生きる新しい命を頂きます。そうしてこそ、私たちは、主イエス・キリストにあって生きる事ができます。それは、主キリストにあって死ぬ練習をしているのだ、とも言えます。冒頭の永六輔さんの言葉に戻ります。「死に方ってのは、生き方です。」神を礼拝して、永遠の光である主イエス・キリストの内に生き、そして、神を礼拝し、御名を呼び求め、賛美しながら死んで行く、なんという幸いでしょうか。自分を神として生き、そして絶望の内に歯軋りして死ぬしかなかったこの身をも、キリストの愛の内に生きキリストの愛の内に死を迎えさせてくださる、父なる御神を賛美します。